夕刊讀賣新聞　2006、4/1　（第三種郵便物認可）

私のいる風景

watashi no iru fuukei

茶室

また一つ大人になれる

森下　典子 さん　エッセイスト

「まだまだ未熟者です。お茶は本当に奥が深い」

「確か8冊目」となる新著『いとしいたべもの』（世界文化社）が来週、書店に並ぶ。食をめぐるエッセーの氾濫には食傷気味の記者が、一読して感じたのは「あの東海林さだおに匹敵する女性の書き手が、とうとうこのジャンルにも現れた」ということ。欣快の至りである。

＜たべものの味には、思い出という薬味がたっぷりついています。だから、おいしいものを食べると、笑顔に、ちょっと泣き顔がまじるのかもしれません＞。この洞察力。

極上の水ようかんは川端康成『雪国』のヒロイン駒子だ、とも記す。＜みずみずしく涼やかで、きりりとしている。ところが、膝を崩すとたちまちしどけなく色気がこぼれ、自分からつーっと入ってきて、こちらを当惑させる＞。この比喩力。そこを褒めると「私が考えたのではなく水ようかんが『私は駒子』と言ったんです」。この超能力!?

いわゆるグルメ本ではない。頻出する身近な食品の商標名を新聞には載せにくいが、初期のインスタントラーメンやカップ麺、ソース、カレールー……40～50代の読者なら、CMソングと共に懐かしい味覚がよみがえる。自作の豊富なイラストも、初公開にしては素人離れしている。「○○兵衛×××うどん」の絵の、うまそうなこと!

典奴、という〝昔の名前〟を言えば「ああ」と反応する人が多かろう。かつて「週刊朝日」の名物コラム「デキゴトロジー」の取材記者として、京都・祇園で舞妓さんを体験するなど突撃ルポで評判を取った。大学4年で就職に失敗して見つけたバイトだったが思わぬ長期連載となり、経験をつづった『典奴どすえ』が1987年に出版された。

当時から、元気いっぱいのチャレンジ精神と軽やかで明るい文章には注目していたけれど、4年前に出た『日日是好日』（飛鳥新社）を読むと文章にグンと深みが増している。なぜかと考えるまでもなく、原因はその本がテーマにしている「お茶」すなわち茶道にあった。

＜「自分は何も知らない」ということを知る＞＜たくさんの「本物」を見ること＞＜五感で自然とつながること＞＜別れは必ずやってくること＞＜雨の日は、雨を聴くこと＞。15の章題の一部を見ても、お茶から得た叡智の豊かさが分かる。

うららかな土曜日の昼、横浜駅から私鉄で三つ目の駅を降りると、和服姿で出迎えられた。自宅に近い師匠宅の茶室に案内してもらう。

「この8畳間は20歳の時に通い始めたので、今年でちょうど30年になります」。年齢を隠さない。「昨日まで分からなかったものが分かるようになる喜び」を、何よりも大切にしてきたからだろう。「初めて濃茶を甘く感じたりすると、また一つ大人になれた自分に気づきます」

滑稽な話も得意な人だが「根は、マジメなんですよ」。はい、よ～く分かるような気がいたします。

文・永井一顕
写真・大久保忠司

もりした・のりこ
1956年、神奈川県生まれ。日本女子大文学部卒業。雑誌のルポやエッセーで活躍。著書に『デジデリオ』『日日是好日―「お茶」が教えてくれた15のしあわせ―』など。